

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>

Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

新春講演会開催

-EU、ドイツ、そして日本 ～ 現在・過去・未来-

本協会恒例の新春講演会が、2月8日午後、船橋市中央公民館で開催されました。講師はゲオルク・ロエル氏（株式会社NRWジャパン代表取締役社長）で、EUとドイツ、そして日本とのかかわりについて、戦後から現在までを振り返り、未来を展望する貴重なお話を伺うことができました。当日は会員ら40人が講演に聴き入りました。



講演中のゲオルク・ロエル氏

ロエル氏は、昭和30年（1955年）に東京でお生まれになられ、5歳まで下落合に住んでおられたそうです。その後ご家族とともにドイツに帰国され、チュービンゲン大学、ベルリン自由大学で学ばれました。その間、国際基督教大学、東京大学にも留学経験をおもちです。氏が社長をしておられるNRWジャパンは、ノルトライン・ヴェストファーレン（NRW）州経済振興公社の日本法人で、ドイツと日本の経済交流をサポートしています。氏は、日本在住すでに31年に及び、講演も流暢な日本語で行われました。

講演の1週間前の1月31日に、紆余曲折を経ましたが、イギリスのEU離脱が正式に決まりました。そうした状況も踏まえて、「EUとは何か?」「EUの危機・改革・活動」「EUと日本」という3つのテーマを中心に、難しい問題をわかりやすく解説してくださいました。



熱心に内容を聞く参加者

講演内容をすべてご報告できませんので、以下では、印象に残っている話題に絞ってご紹介したいと思います。

ヨーロッパ統合の歴史ですが、その出発点は、二度と戦争を起こさないという各国の強い決意からはじまりました。戦争を引き起こす原因は、石炭、鉄鋼をめぐる争いにあるということで、まず欧州石炭鉄鋼協同体が設立されました。続いて原子力を共同で管理する原子力共同体、さらに経済の共同体、そして政治の共同体である現在のEU（欧州連合）へと発展しました。その間、加盟国も6カ国から28カ国へと拡大しましたが、周知のようにイギリスの離脱により27カ国となりました。

ロエル氏は、EUのモットーは「多様性の中の統合」であるとして、「対立ではなく協力」、「国境や境界のない生活」、「共同で問題の解決」という3つのキーワードをあげて、移動の自由、統一市場、単一

通貨ユーロなどを中心に、EUの目指している課題についてお話されました。

「EUの危機・改革・活動」では、Brexit（イギリスのEU離脱）について、その見通しを述べられました。ヨーロッパの難民問題では、2017年だけでも、ドイツに流入した難民の数は80万人以上とされています。こうした事態に対し、ヨーロッパ全体で解決法を模索し、難民を生み出している原因に共同で対処していることを力説されました。

2019年に実施された欧州議会選挙については、そのポイントを次のようにまとめられました。①キリスト教・社会民主系政党は過半数を失った、②緑の党などのリベラル系が続伸した、③反EUや反難民・移民勢力も拡大はしたが、懸念したほど右派は伸びなかった。

「EUと日本」では、どちらも、民主主義、人権などの価値を共有しており、ともに世界的に影響をもつ重要な存在である。国連などの国際的な場で互いに協力しており、環境、科学・技術協力、通商等々の分野においても連携しあっているといったお話をされ、2019年2月に締結された「EU・日本自由貿易協定」についても言及されました。

この講演が行われたときは、コロナウィルスはまだ大きな社会問題になっていませんでしたが、その後の感染拡大のなかで、各国は国境管理を復活させ、EUのモットーとする「人の移動の自由」はすっかり滞っています。今後、EU全体としてどのような取り組みが行われていくのか注目していきたいと思います。（常任理事：木戸 裕）

和やかな雰囲気につつまれて懇親会開催される

講演会終了後に、船橋スクエア21、2階の「今日和」にて33名の参加者を迎え懇親会が行われました。須古理事の名司会の下、講師のG・ロエル社長を



交え若手会員の参加もあり和やかな懇親の場となりました。その中で、宗宮名誉会長を中心とする「カウルの日記を翻訳する会」のメンバーから翻訳の苦労と奥の深さの体験談が発表され、参加者も現況を共有しました。最後に橋口名誉会員の中締めにてお開きとなりました。（理事：志賀久徳）



ドイツ捕虜解放100周年記念行事

-ナラシノの記憶-ドイツ兵たちの記録が語るもの-

今年1月に習志野市庁舎で約2週間にわたり開催されたドイツ捕虜解放100周年記念行事を締めくくったのは、26日（日）13時から約4時間にわたって行われた4名の方による講演会でした。同市は150名募集、170席を用意しましたが、会場はすぐに満席になり、会場外に用意されたパブリックビューイングにも人が溢れる状態でした。当協会からも平尾名誉会長、金谷会長はじめ多くの会員が参加されました。

初めに『ドイツ兵士の見たニッポン』（丸善）の執筆者星昌幸氏が「伝える『思い』-ボトルシップに込められたもの」と題して、自身が掘り起こした収容所の歴史や、関わった人々との思い出を話されました。星氏は、今春定年となりますが、これまでの講演記録は当協会HP（http://jdgc-chiba.com/about/hoshi_kouenn_shiryou.html）にも掲載されています。是非、ご一読ください。習志野俘虜収容所の歴史が、単なる「遠い昔の出来事」でなく、もっと身近なものに感じることができます。

次に同市教育委員会社会教育課文化財係長松浦史浩氏から昨年指定された指定文化財についての解説がありました。『エーリッヒ・カウルの日記』がどのようなノートに書かれたのか、またボトルシップの構造についての詳しい説明を聞くことができました。その作り方や、ボトル内部の繊細な組み立て方には改めて驚かされます。

当協会宗宮好和名誉会長は、約1年にわたって翻訳をした『エーリッヒ・カウルの日記』について、カウルの足跡をたどりながら、色々なエピソードを交えて講演されました。日記については、現在HP掲載に向けて編集作業中です。膨大な量に加え、軍事用語などの専門的知識が必要な内容が多いので苦労話などの逸話はたくさんあり、HPなどで紹介できればと考えています。公開日が決まりましたらまた報告いたします。

最後はこの日のために来日したハイデルベルク大学のメルバー 琢磨博士から、現在ご自身がリーダーとなって進めているデジタル青島アーカイブプロジェクトについての説明が日本語でありました。これは当時の収容所についての史料など、最終的にはドイツ統治時代の青島の記録までをデジタル化し、後世に残すというプロジェクトです。博士はドイツや日本の博物館などが所蔵する資料や史料の調



講演者（左より星氏、宗宮名誉会長、松浦氏、メルバー 琢磨博士）



大盛況であった講演会の様子



講演中のメルバー・琢磨博士

査のみならず、捕虜の子孫が個人的に保有している写真や手紙などの情報収集にも尽力されています。現在のところプロジェクトが完成しても閲覧できるのは大学関係者のみ、とのことですが、新たに、しかもドイツでこのようなプロジェクトが進行しているのは大変喜ばしい、また価値あることです。

講演会にはドイツ大使館からキーゼヴェッター大佐夫妻がプライベートで参加されました。昨年の慰霊祭での挨拶にもありましたが、大佐の祖叔父にあたる方が大分俘虜収容所で病死されています。会員の植松健氏の通訳のおかげで、大佐にとっても大変興味深く、充実した講演会になったようです。質疑応答でも積極的に発言をされ、また講演会後にはメルバー博士との活発な意見交換が行われていました。



キーゼヴェッター大佐夫妻、平尾名誉会長、植松会員

同市文化財係の千葉千亜紀主任主事（当時）によると、本展示会は、1,000名以上、講演会 300名以上の来場者があったそうです。「本行事を開催できたのは、指定文化財の寄贈者、100年以上前の史料を大切に保存されてきた方々のおかげです。」と新たに生まれた交流にも感謝しながら感想をおっしゃっていました。今回講演された方々、国内外における研究者や関係者による日頃の努力が、多くの人々の興味を引いたのではないのでしょうか。たくさんのお会いがある大変有意義な展示会、講演会だったと思います。

（理事・青壮年部：本橋 緑）

心地よい旅

-2019 Düsseldorf奨学生手記-

Henrik Hillenbrand

日本にはとりわけ気配りや思いやり、いたわりの精神があります。これは日本文化の一部です。私は6名いる2019年度独日文化交流育英会の奨学生の一人としてそれを体感したのです。研修旅行は9月に行われました。最初の2週間は主な文化的地域を訪れ、いかに日本とドイツが互いに豊かな関係を育んできたのかを改めて発見しました。そして次の2週間の研修では、日本の職場を体験することができました。

旅の始まりは千葉県日独協会の方たちと過ごした素晴らしい夕食会でした。私にとって日本があこがれの地であるように、多くの方にとってはドイツがあこがれの地でした。自国を日本人の視点から見るのは興味深い事です。別れ際に自分たちの名前が漢字で書いてあった色紙を頂きました。漢字の意味や由来を考慮に入れた、一人一人に最もふさわしいプレゼントです。とても美しく、まさに気配りがあると感じました。またその後訪れた香川日独協会や奈良の天理教教会等、



千葉県日独協会主催の夕食会における筆者

行った先々での様々な気配りには大変感激しました。私たちが心地よく過ごすことはどのホストにとっても一番の関心事のようでした。

美しい倉敷の町では倉敷民藝館を訪れ、日本の手工業や手工芸品に感銘を受けました。そこには「わび・さび」の美学で造られた陶磁器や地方のガラス製品が展示されています。最高の傑作とは、単に質素で日常感が漂い、風雪にたえたようなものなのです。「エレガント」であるとは、いかに努力の跡が伺いしれないかということ。そしてこの何気ない、苦勞の痕跡を消すことこそ、終わりのない鍛練の繰り返しによってのみ到達することができる境地なのだと思います。



旅行中の風景

デザインも一つの手工業です。私は中目黒にあるスタジオでの研修を修了しました。事務所は地下鉄の高架下であり、社長のシュンをはじめ約15名が働いています。初めは新しい環境にどぎまぎし、少し孤独を感じました。言葉の壁、黒を基調とし、静かに集中した職場の雰囲気や服装に関する規則等が原因でした。それでも2週間同僚と共に過ごし、次第に打ち解けました。ジェスチャーや声のトーンだけでも人柄はあらわれます。コミュニケーションには必ずしも発した言葉だけが重要なのではないことに気づきました。



研修先のスタジオ

私の担当者だったトムとシンサクは私をたくさん支えてくれました。彼らとは英語で話し、協議には多くの時間をとりました。話し合いから新たな方向性や関連性が生まれることも度々ありました。ドイツでこのような話し合いがあると、なるべく早くに決断を下さなくてはというプレッシャーがありますが、ここでは違います。結果志向より過程を重視するのです。それでいて生産性が下がるわけではないので、この新しい仕事の流儀はドイツに帰ってからも応用可能です。

日本ではどこへ行っても歓迎されていると感じ、そして自分の日本語は旅の間に変化していきました。最初はたくさんの得体のしれない母音や子音が聞こえてきましたが、次第にそれらを聞き分け、言葉の理解にもつながりました。文学に興味がありますが、俳句や短歌などは翻訳者によって解釈に違いがあります。もっと日本語を勉強していつか芭蕉の俳句と牧水の短歌を原文で読めるようになりたいと思っています。旅はいつ始まり、いつ終わるのでしょうか。私の旅はドイツに戻っても終わっていません。旅は住まいのあるケルンでも続き、思い出の中で生き生きとして私を満たしてくれています。日本で体験できたことに感謝します。今回の旅で学んだこと、それは、気配り - Aufmerksamkeit - によって、私たちに喜びが生まれ、人々の絆が深まり、そして生活がよりよいものになるということです。



京都旅行中の筆者

Dresdenから始まったドイツへの強い想い



ドイツと私 - 大野 亘児

皆様、はじめまして。昨年10月より千葉県日独協会に学生会員として仲間入りさせていただきました、大野亘児と申します。ドイツと僕のつながり、それは今から約3年前の夏、大学の2週間ほどの短期留学プログラムで偶然訪れたドイツ東部の街、Dresdenとの出逢いから始まりました。

大学で選んだ第二外国語はフランス語、当時はドイツ語といえばGuten Tagを知っていたくらいでしょうか。でも僕にとってそれは、かねてよりずっと憧れを抱いていたヨーロッパの地を初めて踏んだ瞬間でした。そこで僕が目にしたものは。かつて「エルベ川のフレンツェ」とまで称された、その歴史ある文化都市の美しき旧市街の光景でした。その中心に立つ、聖母教会Frauenkircheの壮麗さでした。でもそれらは皆すべて、一度は第二次大戦中の空襲で焦土と化した景色だった。その事実を知った僕は帰国後、夢中になってDresdenにまつわる本をかき集め、読みあさったのです。そして半年後、気づけば自ら教科書を手に取り、独学でドイツ語を学び始めていました。自分が心惹かれたあの街のことをもっと知りたいという一心で。



ドレスデン聖母教会外観

さて、もともと僕は外国語を学ぶのが大好きでしたから、ドイツ語にもどんだのめり込んでいきました。あのドイツ語特有の発音が、語順が、語のつくりが、どこなく好き。僕のドイツ及びドイツ語への思い入れはますます強くなっていきました。そうこうするうちに2018年秋から1年間、ドイツのLeipzig大学へ交換留学する機会を得たのです。自分がこんなにも好きなドイツ、でもその地で自分はきちんと生活したことすらない…ドイツで暮らすってどういことなんだろう？自分にとってドイツは本当に合っている場所なんだろう？それを確かめたくて、旅立ちました。



ライプツィヒ大学とアウグスト広場

Leipzigでの1年を経て帰国した今言えることは、もうドイツでの生活が、自分の想像していた以上にすごく気に入ったということです。かつてBachやGoetheをはじめとする著名な芸術家たちが活動していた文化豊かな街、国内で2番目に古い大学を有し多くの学生が行き交う、古くは東西ドイツ統一運動発端の舞台ともなった自由の気風あふれる街で、学び感じ取ったことはたくさんあります。多くの大切な人々に

(次ページへ続く)

も出逢いました。だからこそ今、またドイツへ帰りたいという思いが何より強いのです。

実のところ大学において僕は理学を専攻する者ですが、自分にとってドイツとの出会いは本当に運命的で、だからこそ将来はドイツやドイツ語に直接関わられることをしたいと率直に思います。ドイツと僕の歴史は協会の皆様のそれに比べれば、まだまだ短いものでしょう。どうか皆様には、今後ドイツと僕の関係がどう発展していくか、そっと見守っていただければ幸いです。



現地で開催した浴衣着付け体験会（筆者：前列左から2番目）

活動報告

トールペインティング教室

1月25日（土）に船橋市中央公民館でトールペインティング教室が開催されました。去年に引き続き西川珠子先生に講師をしていただき、Willkommen（ウェルカム）プレートを作成しました。デザインは今年も先生オリジナル。少しスモークがかかったパステルカラーがベース、春をイメージしたそうです。会員の大田黒訓子さんがお母さまと一緒に昨年夏から先生の教室に通い、当日もお手伝いをされる予定でしたが、残念ながら体調不良のため、急遽お母さまの亜弥子さんに助けていただきました。



今回は参加者が会員、非会員を含めて9名、去年参加された方、内訳も経験者、初心者それぞれでした。はじめは緊張して筆の進みも慎重でしたが、だんだん慣れてくると、かわいらしい葉や花がプレートに次々と描かれていきました。途中亜弥子さん差し入れのお茶や飴で一息入れながら、あっという間に時間が流れました。



写真を見ていただければ、教室の和やかな雰囲気や充実感が伝わるとと思います。昨年夏から準備をしていただいた先生、お忙しい中お手伝いや参加をくださった皆様、どうもありがとうございました。



（理事・青壮年部：本橋 緑）

西川珠子先生：ブログ <https://ameblo.jp/tama24riv>
Instagram <https://www.instagram.com/tama24riv>

書籍/Buch

“EUROPA Unsere Geschichte 3”

Die Eiche No.115で紹介した書籍の続編です。毎年1回、続編がリリースされます。次号第4号が最終巻となるかと思います。今回は、19世紀初頭のウィーン会議から第一世界大戦までを取り扱っています。19世紀は、ナポレオンによる欧州制圧、その後の体制復興、そして国民主義の台頭から産業革命、民族主義への展開まで歴史区分としては、波乱に満ちた自体区分になるかと思います。今回もドイツ、ポーランド間での共通歴史となっています。視覚的にもわかりやすい図版、当時の資料が多く入っており、19世紀の欧州史に関心おありの方には、お薦めです。¥2,716- Amazon.



（理事・青壮年部：勝見 浩明）

今後の予定

●新型コロナウイルスの影響により、予定変更の可能性もあります。6月13日（土）の総会、総会記念講演は、現時点で未定です。書面会議での可能性もあります。別途、事務局から適宜ご案内いたします。

5月9日（土） 運営委員会

6月13日（土） 運営委員会 13:00-14:45

6月13日（土） 総会 15:30-16:30

総会記念講演 16:45-17:45

未定

●場所 中央公民館第3集会室

会員情報

新人会員 木戸秋 圭一 市川市

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人

清和会、(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事

編集後記

現在、世界中の人々の生活、世界経済に深刻な影響を与えている新型コロナウイルスに対比して、約100年前のスペイン風邪と対比した情報がFacebookでも何回か目にすることがありました。当時、スペイン風邪も世界的に猛威をふるいましたが、発症元は、スペインではなく、アメリカであったそうです。当時、検閲がゆるかったスペインの報道が最初であったことから「スペイン風邪」と命名されたとのことでした。4/4付のこの番組“MrWissen2go Geshichte”では、過去の教訓から何を生かすかという点では、早期の躊躇ない対応、徹底した隔離、そしてテマ情報への対処を挙げていました。現代の世界中を瞬時に駆け巡る情報と対比して1918年当時は、ドイツにおいて11月革命もあって政権が著しい不安定であったかと思えます。情報統制により、疾病情報も迅速に、かつ適切に報道できなかったこともあったことも想定できます。塹壕での密集した環境も影響あったかもしれません。今、耐える時期かと思えますが、早期にこの世界中の苦境から解放され、普段の生活に戻ることができるように願っています。（勝見 浩明）